

## キナ伝説の里、チンチヨンとチンチヨン伯爵夫人

泉 彪之助

新大陸からヨーロッパへのキナの渡来について、次のような説（以下キナ伝説）がある。スペインのチンチヨン伯爵夫人（Condesa de Chinchón）が、夫が副王の職にあつたペルーで三日熱に罹患し、これが先住民が用いていたキナ樹皮で完治した。強い印象を受けた伯爵夫人は、キナ樹皮をヨーロッパにもち帰つて紹介し、普及させたという。このことからリンネはキナ樹を *Cinchona* と命名した。<sup>(1)(2)</sup> 現在はこの説は伝説であるとされ、史実としては否定されているが、<sup>(3)(4)</sup> チンチヨンがその舞台となつたことは事実である。私はこの伝説に関心をもち、チンチヨン（Chinchón）を訪れ、現地で出版されたガイドブック（以下『チンチヨン』<sup>(5)</sup>）も入手した。伝説そのものは別稿で論ずることとして、チンチヨンという土地を紹介したい。

### 一．チンチヨンの地誌<sup>(1)(5)</sup>

チンチヨンは、スペイン中央部、カステイリア地方にあり、マドリッドの南約五〇キロメートルに位置する。高原の奥の小さな村だが、古い時代の面影を残していることと、アニス酒の生産地であるところから、マドリッド近郊の観光地として評判が高い。マドリッドからバスの便があり、一時間ほどの道程である。人口は、約四千人をかぞえる。

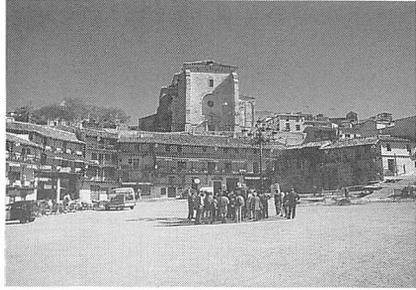


写真1. チンチョンの広場(Plaza Mayor)  
正面の高い建物は聖母被昇天教会



写真2. チンチョン伯爵居城  
(Castillo de los Condes)

村の中心には広場(Plaza Mayor)があり、それを取りかこんでバルコニーを持った家がならび、広場を見下ろすような形で聖母被昇天教会が見える(写真1)。町外れにはチンチョン伯爵の居城(Castillo de los Condes)が廃墟となつて残っている(写真2)。日本のガイドブックに、この城を見学させてくれるように書いてあつたが<sup>(1)</sup>、見たところ閉鎖されたままであつた。

聖母被昇天教会は、画家フランシスコ・ゴヤの末弟カミロ(Camillo José de Goya y Lucientes)が

司祭をつとめたことがあり、その縁でゴヤの絵がある<sup>(5)(6)</sup>。チンチョンはまた、アニス酒の生産地として酒屋が軒をならべ、古い醸造所もある。

## 二. チンチョンの名前の起り<sup>(5)</sup>

年代記によれば、かつてチンチョン(Chinchón)は、その丘が蹄鉄の形をしていたところから Cincio と呼ばれた。これが Chinchó となり、Chinchón(蹄鉄の意味を含む)と変わつて現在の地名となつたという。

別の説では、チンチョンは円形競技場の意味のラテン語 Circum(Circus)から来しているとも、チンチョンを形成する五つの村落と関係する Cincun から来しているともいう。いずれにせよ Chinchón 語頭の Ch は、最初はっであつたのが後に ch に変つたものであるとされる。

ハギス (Haggis, A. W.) がキナ伝説の基本資料としている Sebastiano Bado の文 (ラテン語) では、チンチョンが Cinchon と書かれてゐるので、Cinchona の綴りはこれから来たものであろう。

日本では、チンチョンがシンコンあるいはキンコンと呼ばれることがある。<sup>(2)</sup> Cinchona は日本薬局方ではシンコーナと読まれ、前述のようにチンチョンはかつて別の名をもったが、ゴヤの作品が「チンチョン伯爵夫人」と呼ばれる (後述) などの例が確立しているので、地名はチンチョンと呼ぶべきであろう。オックスフォード英語大辞典は、Cinchona の綴りはあやまりで、Cinchona と訂正すべきだが、歴史的に定着しているのでむずかしいとしている。<sup>(7)</sup> スペインでは Cinchona は、歴史的経緯を重視した cinchona (tjintóna) と、Cinchona の綴りをスペイン語化した cincona (tjinkóna) と両様に綴られる。

### 三. チンチョン伯爵の来歴<sup>(5)(9)</sup>

チンチョンは小さな村だが、マドリッド防衛の拠点という意味でもあつたのか、高い身分の貴族が領有している。

カステイリア王エンリケ四世の宮廷につかえたアンドレス・デ・カブレラ (Andrés de Cabrera) (一四三〇年生) は、一四六七年にベアトリス・デ・ボバディリヤ (Beatriz de Bobadilla) と結婚し、一四七五年に双方はモジャ侯爵 (marqueses de Moya) の称号を授与された。<sup>(5)</sup>

アラゴン王子フェルナンドとカステイリア王女イサベル、後のカトリック両王は、結婚に際しイサベルの兄エンリケ四世の承諾を得ていなかったため、イサベルとエンリケの娘フアナとの間にカステイリア王位について継承権の争いが起こつた。<sup>(8)</sup> モジャ侯爵夫妻は、この争いの中で功績があつたので、一四八〇年にカトリック両王からチンチョンの支配権を与えられた。<sup>(5)</sup> これがチンチョンの最初の領主である。

目羅信英によると、一四八七年、女官の一人がイサベル女王と取り違えられて刺客に刺されるといふ事件があり、こ

の女官がベアトリス・デ・ボバデイリア（目録は、ベアトリス・フェルナンデス・デ・ボバデージャとしている）であったという。<sup>(9)</sup>ベアトリスは、女王のよき相談相手であり、姉妹同様に育った間柄で、その証規に、両王は即位後初めての爵位授与に夫のアンドレス・デ・カブレラを選んだ。<sup>(9)</sup>二人の間に生まれた娘のイサベルは、後に初代ペルー副王となるアンドレス・ウルタード・デ・メンドーサの祖母に当たるとする。<sup>(9)</sup>新大陸最初期の総督（副王制が確立する前の統治機関）フランシスコ・デ・ボバデイリアは、ベアトリスと同じ家の出であろう。<sup>(9)</sup>

モジャ侯爵夫妻の次男フェルナンド（don Fernando Cabrera y Bobadilla）がチンチヨンの領主権を継いだだが、一五二〇年にテレサ・デ・ラ・クエバ・イ・デ・トレド（doña Teresa de la Cueva y de Toledo）と結婚し、スペイン王カルロス一世からチンチオン伯爵の爵位を授与された。これが初代チンチオン伯である。伯は、一五二〇年に起こった民衆暴動コムネロスの反乱に際し、セゴビアの王宮の防衛に功績があった。初代チンチオン伯は、一五二二年に死去した。<sup>(5)</sup>

フェルナンドの子ペドロ・フェルナンデス（don Pedro Fernandez de Cabrera y Bobadilla）が跡を継ぎ、一五五四年にフェリペ二世が英国のメアリ・チューダーと結婚する際英国へ随行したり、一五七〇年のフェリペ二世のアナ・デアウストリア（doña Ana de Austria）との結婚に奉仕するなど、宮廷で活躍した。これが二代チンチオン伯である。一五七五年に死去。<sup>(5)</sup>

第三代チンチオン伯、サンチャゴ勳爵土デイエゴ・フェルナンデス（don Diego Fernandez de Cabrera y Bobadilla）は、フェリペ二世の宮廷で重要な役割を果たした一人で、エル・エスコリアル建築など国務に参画した。一五九八年のフェリペ二世の臨終にも立ち会っている。伯自身は、一六〇七年に死去した。<sup>(5)</sup>

第四代チンチオン伯ルイス・ヘロニモ・フェルナンデス（don Luis Jerónimo Fernandez de Cabrera y Bobadilla）の夫人が、キナ伝説の主人公である。ルイス・ヘロニモ・フェルナンデスは、一六二八年から一六三九年までペルー副王の職にあつた。<sup>(3)(5)</sup>その後、スペイン無敵艦隊の総司令官に任命されてペルーをはなれている。<sup>(3)(5)</sup>キナ伝説では、はじめ彼の最

初の夫人アナ・デ・オソリーオ (doña Ana de Osorio) の名があげられたが、アナ・デ・オソリーオは夫の副王就任前に死去しているところから、現在では二番目の夫人フランシスカ・エンリケス・デ・リベラ (doña Francisca Enriquez de Rivera) が伝説の主人公とされる<sup>(5)(6)</sup>。『チンチョン』は、「フランシスカ・エンリケスは、一六三二年にスペイン、次いでヨーロッパへキナを紹介し普及を助けたことよって、夫の伯爵より有名になった」と書いている。ハギスによれば、フランシスカ・エンリケスも、ペルーから帰国するとき新大陸をはなれる前に死去しているので、夫人の貢献は伝説に過ぎないというが、ここではその問題にふれない。

チンチョン伯爵夫人とキナをめぐる物語は、ホセ・マリア・ペマン (José María Pemán) によつて、「聖なる副王夫人 (La Santa Virreina)」（一九三九年）という戯曲として発表されている<sup>(5)(6)</sup>。

#### 四．ゴヤの作品「チンチョン伯爵夫人」<sup>(5)(6)</sup>

堀田善衛は、ゴヤの作品「チンチョン伯爵夫人」(La condesa de Chinchón) を、ゴヤの多数の肖像画中の最高傑作としている<sup>(6)</sup>。このチンチョン伯爵夫人は、キナ伝説の主人公よりずっと後の人だが、チンチョンという土地を象徴するものとして紹介したい。

ゴヤが描いたチンチョン伯爵夫人マリア・テレサ・デ・ボルボン・イ・バリャブリガ内親王 (doña María Teresa de Borbón y Vallabriga) (ボルボン はボルボンのスペイン語表記) は、スペイン王カルロス四世の総理大臣で王妃の愛人でもあったマヌエル・ゴドイの夫人である。チンチョン伯爵夫人としては第一四代であった。王妃マリア・ルイサは悪名高く、ゴヤの有名な作品「カルロス四世の家族」中の重要人物だが、この絵にはチンチョン伯爵夫人は現れていない。

マリア・テレサは、カルロス三世の末弟ドン・ルイス (don Luis Antonio Jaime) と、同名の母マリア・テレサとの間に生まれた娘で、カルロス四世のいとこにあたる。ゴヤは、幼いときのマリア・テレサの肖像も描いている<sup>(6)</sup>。ボルボン

家の血を引くところから、愛人をブルボン家の一族に加えようとする王妃の策謀で、ゴドイと結婚することになった。堀田は、政略結婚の犠牲となった薄幸の女性マリア・テレサに深い同情をこめて、その生涯とゴヤの作品を解説している。<sup>(6)</sup>氏によれば、マリア・テレサは一八〇〇年に一代限りのチンチョン伯爵夫人の称号を与えられ、ゴヤの作品はその受爵を祝って画かれたものという。

『チンチョン』の解説は、これと少し異なっている。フェリペ五世の親王フェリペ・デ・ボルボン・イ・フアルネシオ (el infante don Felipe de Borbón y Farnesio) が、カブレラ・ロボデイリア (Cabrera-Robadilla) 家からチンチョン伯爵領を購入した。一七六一年に、伯爵領はその弟、前述のドン・ルイスに譲られた。ドン・ルイスの死後、その子のルイス (don Luis María de Borbón y Vallabriga) が相続したが、一八〇三年にその権利を妹マリア・テレサにゆづったものであるという。マリア・テレサからは、娘のカルロッタ・ルイサ (doña Carlota Luisa Manuela Godoy) が、伯爵領を相続した。

これらの経緯から、現在は小さな村に過ぎないチンチョンが、かつて重要な土地であったことがうかがわれるであろう。

## 五. チンチョンへの行き方

ガイドブックには、次のように書かれている。

「バスが唯一の便。マドリッドのメトロ駅 Conde de Casal を出づ、Ave de Mediterráneo のバス停から。チケット売り場はバス停背後のビルの一F。La Veloz社。Valdelaguna 行きに乗り、所要1時間。」<sup>(7)</sup>

しかし私はバスで行こうとしたが、どうしてもバス停がみつからず、やむなくタクシーで行った。その理由は次の通りである。

Conde de Casal は、マドリッドの地下鉄六番線の駅で、地上へ出ると Conde de Casal 広場になっている。ここでもっとも目につくのがクラリッジ・ホテルという建物で、その右側一階が長距離バス・センターになっており、このあたりでバス停といって聞くと、みなこのセンターを教えてください。ところがこのセンターは、チンチョン行きのバス停ではないのである。

バス・センターのインフォメーションでは、同じようなことを聞いてくる日本人がたくさんいると見え、目印中華料理店の名前を漢字で書いてある地図を見せてくれるのだが、それにしたがってさがしてもバス停が見つからなかった。後で考えると、バスが左側通行をしている日本での習慣から、Avenida de Mediterráneo のクラリッジ・ホテルの反対側、つまり市外へ向かって左側をさがしたためらしい。右側をさがすべきであった。

もしこの推定が正しければ、マドリッドでは次のような方法でバス停を探すとよい。バスの終点の Valdelaguna は、チンチョンに近い村のひとつである。チンチョンではバス停は村の中心にあり、分かりやすい。

(一) 地下鉄六番線の Conde de Casal 駅でおりる。

(二) 広場では、クラリッジ・ホテルの左側の大きな通り (Avenida de Mediterráneo) の、ホテルに接した側でバス停をさがす。

(三) もし分からなければ、クラリッジ・ホテルの一階右側面にバス・センターの入り口があるので、そのインフォメーションで聞く。

Avenida de Mediterráneo は、アランフェス、チンチョン方面へ行く幹線道路で、タクシーに乗ってもこの道を行くことになる。タクシー料金も、片道約五〇分の往復にチンチョン滞在一時間程度で七、〇〇〇ペセタ(五千円)という安さなので、気楽に使えてであろう。

観光地なので、チンチョンへ行く途中の道標も完備しており、レンタカーで行くこともむずかしくないように思われ

た。私さがしたところでは、チンチョンに本屋はみつからなかった。タクシーの運転手の手助けて、ある土産店で聞いたところ、ガイドブックを入手できた。村のインフォメーション・センターには行かなかつたが、もし行けば英語のパンフレットなどがあったかも知れない。チンチョンには、昔の修道院をホテルにした国立のパラドールもある。なお、マドリッドの王宮の中に薬事博物館があり、キナについての展示もあるというが、私は行く機会がなかつた。

(この論文の要旨は、平成八年六月第九回日本医史学会総会で発表した内容の一部である)

### 注・文献

- (注) 貴族の人名の最終部分は、家名あるいは父母の家名を示す。
- (1) 『ブルーガイド・ワールド スペイン』八三頁、実業之日本社、東京、一九九〇年
  - (2) 石坂哲夫『やさしくくすりの歴史』五四頁、南山堂、東京、一九九四年
  - (3) Haggis, A. W. : Fundamental errors in the early history of cinchona, Bull. Hist. Med., 10:417-459, 568-592, 1941
  - (4) P. Lain Entralgo : Historia de la Medicina, 364p, Ediciones Cientificas y Técnicas, S. A., Barcelona, 1994,
  - (5) José Talavera Sotoca : Chinchón, Historia, Arte, Gastronomía, Fiestas, Anzos, S.A., Madrid, 1990
  - (6) 堀田善衛『ムヤ(二)』新潮社、東京、一九七五年
  - (7) The Oxford English Dictionary, III, 2nd ed., 218p, 1989
  - (8) 川成洋『図説スペインの歴史』河出書房新社、東京、一九九四年
  - (9) 目羅信英『コロンプスの真実』一三三―一三四頁、近代文芸社、東京、一九九五年
  - (10) Francisco Guerra : The introduction of cinchona in the treatment of malaria, J. Trop. Med. Hyg., 80((6)):112-118, 135-140, 1977
  - (11) 『地球の歩き方 マドリッド』一六二頁、ダイヤモンド・ビッグ社、東京、一九九三年

(老人保健施設 陽翠の里)